分枝 *branching*

http://branching.jp
branching 11 publish : 09.December.2014

お父さんのエレベーター、私のエレベーター

Natsue KIMURA 1984–
木村夏衣

photo by Natsue KIMURA

◆1 階 at 広島県入市

私とお母さんは、お父さんのエレベーターに乗ってここまで来た。覚えているのはここから先から、ここが1階でいいよね。

わたしのお父さんは、エリート会父さん。

毎朝ビシッとしたスーツで出発。大きな会社で「ふちょう」をやっているのは（よくわからない）。

お父さんは、わたしが言うことを聞かないと大声で怒鳴る。その時のお父さんは、おとぎ話の鬼よりもちょっと怖い。

（前にお母さんの車の運転におお父さんが怒鳴った。その後、ショッピングモールでわたしはお母さんに「車のっかず、お父さんに渡してきて」と言われ、お父さんとわたしたちは別々に帰った）

でも実は、お父さんのいない外ではわたし、手下を引きつれた「悪い子供」で有名なのだ。イタズラ、最高。

◆いきなり最上階へ at ベルギー

エレベーターが、家賃の一番高いオーシャンビューの最上階で止まった。お父さんの「転勤」で、わたしたちは外国に引っ越すことになった。

ひとりっこの私は、イトコや友達のユカちゃんと離れるのが悲しくて、あっちの空港に着いても「日本に帰ろう！（外国人がいるうぅ！）」と泣きわめいた。

でも、その後私を待っていたのは、見たこともない大きなお城のような家だった！

部屋が 12 個に、トイレとお風呂が3つ！ 3人でどうやって全部のお部屋を使うんだろうッ？

そしてはじめての「転校」。私はなぜかその日から学校ではだれ、「一言もしゃべらない子」になった。

廊下で男の子たちが私を見て「おい 無口（あだ名）！」「喋いやつ！」と呼ぶ。前の私はあんなに手下たちを引き連れて遊び回ったのに、一体どうしたんだろう？誰にも声をかけることができない。

！！！私の中身が<逆さま>になってしまった！！！

でも親はそんなことは知らず、週末に家族で過ごす時間は、夢とお金に満ちあふれていた。

毎月の旅行に豪華なホテル。私たちを乗せたエレベーターが、ぐんぐん上がる！

フランス、ドイツ……食器棚には、各地の高そうな食器がどんどん増えていった。

そして驚くべきことには、あんなに怖かったお父さんと<二人で>アスレチックに乗ってはしゃいだり、卓球で勝負するようになっていた。

——————————————————>>

◆後々に地下へ at 広島県 B 市

お父さんが会社をやめて、日本に帰ることになった。やった！また皆に会える！

でも連れて行かれたのは、前とは違う町……2度目の「転校」だ。

そしてやっぱり、ベルギーと同じように、私のあだ名は同じものになった。

◆地下 5 階 at 広島県 C 郡

3 度目の転校。

今度は山奥の田舎に「マイホーム」が建ったのだ（いつの間に!? すごい田舎だけど）。

中学校はエクラスだけ。途中で何がきっかけでもなく流行の「いじめ」が蔓延し、私はいつの間にか「いじめられる側」に入っていた。

父は私を「根性が無い」「お前はまだ恵まれてる」と言った。父に対する怒りがふつふつと込み上げてくる。

父と私の間にだけ、黒い墨汁がポトポトと垂れて、やがて雨のように勢いを増し、あたまりになっていく。

一刻も早くここを出て、都会へ出ることを切望するようになった。

——————————————————>>>>

◆地下 10 階 at 同郡

忠望していた、広島で一番街中の高校に合格した（朝 6 時の電車で 1 時間+路面電車だけど）。

マンガのようなお洒落な高校生ライフを夢見て必死に勉強し、学区外 5 %枠で合格した。もう私をいじめるやつもいない！街にはバルコもある！

でも都会でも私は「暗い子」のままだった。「暗くないグループ」には入っていたけれど、上手くつきあえず、段々置きおりされていった。

……今度は<転校>じゃないのに、どうして？

地下から上を見てて一番最初の私コが何開いてるのか探すけれど、深すぎて、何も見えない。

——————————————————>>>>>>>

◆地下 20 階 at 同郡

父が会社をケンカやトラブルで辞めると、というのが続く。ローンが払えない。母も働くことになった（私の通学代は 1 日 2000 円もした）。

更に私が神経病になったことが父を苛立たせ、家の中は今にも感電爆発しそうなピリピリ状態。父の怒鳴りが止まらない。

何の理由もなく父が怒鳴る日が続く。私が部屋から出なくなる。

「人は疑っつかれて、この世はろくな やつばいないんだ。父の口癖。

私と母は、父のエレベーターから片足をおろした。

——————————————————>>>>>>>>>>>

◆地下 50 階 at 同上

もう毎日「お父さん今日も機嫌悪いのかな？」で頭がいっぱいだ。そして通学による睡眠不足。もう、疲れた。

——————————————————<<<<<<<<<<

◆久しぶりに地上へ at 京都

第一志望の東京は無理だったが、京都の大学に合格し、この家を出られることになった！あふれ出す解放感。

京都にはおじいちゃんとおばあちゃんがいて、週末はいつも豪華な鍋を囲んで「家族団らん」だった。おじいちゃんとはよく美術館や舞事に行き、東京の浦国神社参拝にも付いて行った。

「あんたら、ほんま仲良しやなぁ」が親戚たちの口癖だ。

……おじいちゃんがお父さんだったら良かったのに。

私は完全に父のエレベーターからおりて、自分のエレベーターに乗っていた。

——————————————————<<<<<<<<<<<<

◆乗り換えて 50 階 at 東京

毎週新幹線で東京に通った過酷な就職活動が実を結び、ずっと夢見ていた、憧れの東京ライフが始まった！

父も、自分のように娘が東京で活躍することに期待していた。

——————————————————>>>>

◆地下へ at 東京

かつての父のように、今度は私が会社を辞めるのを祈り返すようになる。私のエレベーターが、ワイヤーが切れたように下降していく。

誕生日 2 日前にして 3 つめの会社にリストラ宣告をされた時、私はテスクで気怠としていた。そこへ「父さんが癌になった。手術も無理」という電話が入った。

（こういう時に限って「余命 ×× ヶ月の花嫁」なんてタイトルが流行るのだ）

おかしい。父さんをあんなに嫌っていたのに、何故かひどく動揺し涙がでて、有田神社に父さんのことを祈った。

その日から、私と母は、再び父のエレベーターに集まりだした。

——————————————————>>>>>>上昇下降上昇乗り換え上昇下降……<<<<<<

5 年後、臓器の一部を失ったが父の癌は完治した。奇跡だった。

その後私が父が一番嫌う神経系の病気で入院した時、なぜかなは私を否定しなかった。それどころか、父には「ありがとう」言葉のメールが届いた。

「希望を捨てず、前向きに生きて下さい。人生、捨てたものではありませんよ。

先日、両親が 20 年ぶりに東京に来た。

自分の母校の大学の門前で、父さんが嬉しそうに写真をせがむ。「門の下が良いな！」

高円寺のボロボロの喫茶店で、コーヒーを飲んで笑う。「美味いな！」

私の狭い部屋に入って笑う。「狭いな！」

私たちは今、別々のエレベーターにいる。母と父のエレベーターは今、上昇中らしい。私のエレベーターは、まだ地下だと思う。

でも、あっちのエレベーターが上がるほど、私のエレベーターもたぶん上がっていく。連動ボタンになったらしい。

おわり。

木村夏衣 Natsue KIMURA
クリエイター
1984 年広島県呉市生まれ

ほくろ

Shigemichi BINNAKA 1941–
備仲臣道

長い黒髪の陰から、色白の女がこっちをのぞいているように見えた。

頬の上で きれいに切りそろえた前髪の下に、切れの長い目のくっきりとした黒い瞳が光っている。頬骨の上から少し目尻に近い辺りに、大きなほくろがあるのが美しく見えた。こめかみの上にも、もう一つあるのもしく、女が頭を動かすたびに、髪の下に見えたり隠れたりする。なにか判らない気のようなものが、私のほうへ迫ってくるように思われた。

「お待ちしていました」

こっちを見ようすで、はっきりとした声で言った。続けて、ずうっと長いこと――と言ったようであったが、それきりあとは黙っている。

誰だったろうか、ずいぶん昔に会ったことがあるようなと、思い出しかけて、あとが判らない。

女はつっと立って部屋の隅へゆくと、お茶をんくもむこった。私の前に茶碗を置いたときに、両手の甲と腕にも、いくつかのほくろがあるのが見えた。黒い服を着ているように思の色が白いから、黒い点が少し青みを帯びて、ことさら美しいのだろうと思った。

「数えてみたことがありのでしょ」

女はそう言って、さっきの席にもどった。こっちを見て、そっと笑ったようである。考えて見ても、どうもよく判らない。少し不気味に思えなくもないけれど、この憎かいしいような気持はなんなのだろう。

そのはど高くはない山の頂上に、周囲を雑木林に囲まれて、丸い小さな湖があった。風もなく、湖面は空の色を映して静まっていた。手漕を置いたようである。湖畔に小さな宿屋が一軒あって、その前から岸へ降りた所が沖へ乗り場になっている。観やかであっても、木々のほかになにも見えない山道を、長いことゆってきた目には、前から急に開けて、目の下に見える湖面に、ほっとする思いであった。

宿にチェックインしてから外に出てみたら、水の上に出てみたくなった。ボートを自分でこいで湖のまん中へ出るのに、そのはどの力はいらなかった。ボートの縁からこわごわ水底を見たければ、ただ深くを静かな水があって、底のほうは暗くてなんにも見えない。よほど深いのだろうと思ううちに背筋がぞくぞくとしてきて、水中に引き込まれそうに思えた。

そのとき、急に辺りが暗くなって、空の高みから黒い雲が降り、霧が流れるようなかさな粒の雨が降り出した。湖面はにわかにささくれだって、風に吹かれた波が岸へ向かって一路白く走った。正体の知れないものが湖面を渡ってゆくって、体の中を冷たいものが通り抜けたと思ったら、

岸にもどると、暗い湖面はもう静まって、雨も上がり、そよとの風もなかった。霧が雑木林を包んで、辺りは神々しい気に満ちている。長い黒髪の女が一人で立っていたが、私に気づくと背を向けた。顔は見えないけれど、雨にぬれた柳がふるえているので、泣いているのだろうと思った。

「風邪を引きますよ」

余計なお世話とは思ったけれど、横を通り過ぎるときに声をかけたのは、放っては置けないような気がしたからだが、なんにも反応はなかった。

湖上の景色は時とともに移って、いろんな色に変化して見せ、なんとも言いようのない荘厳なものが胸に迫るようであった。こうして日が暮れてしまうのかと思うと、わけもなく悲しい気分に襲われて、私は泣いているのかもしれなかった。

囲炉裏を囲んでの夕食で、ほかに客がなかったのだろう、私の右側に湖畔にいた女が座った。色白の肌で、左目の斜め下に少し大きめのほくろがあった。艶めかしいというのとは違った、気品のある顔を、ほくろが演出しているように見えた。

酒を飲みはじめて少したったころ、酔いも手伝って軽い気持になったのだと思うが、私は彼女にお銚子をさしてみた。はじめの二つ三つは受けたが、あとは私のほうへ手で押すような仕草をしてから、杯を伏せた。酔った大げさな気持ではなく、魅惑的な雰囲気の人だと思った。ほくろのせいだったかもしれない。

彼女のほうが先に席を立って部屋に引っ込んだはずであったが、そのあと私の部屋へきたような気がするのは、どうした成り行きだったのだろうか。通ごしたというほどに酔っていたとは思えないのだが、考えてみてもよくは判らない。

薄明るい電灯の下で、彼女の白い頬の上のほくろが、黒と言うよりも青に近い色をして妖しく艶めかしく、肌の香はくろわしく匂いたって誘っているように感ましい。ほくろの一つ一つを指で押してみて、確かめたように数えたという記憶が私にはある。けれども、それが私の見た夢だったのか、本当にあったことなのか、まだ一つはっきりとしない。朝になってはじめたとき、私は布団の上に一人であった。別々に部屋をとったのだから当然だが、それより前に、いったい彼女が誰なのかさえ知らないのである。

それきりだったか湖畔のなかで、いま私の目の前にいるなぞのかどうか、それもはっきりとはしない。黙って座っているほかにないのは、彼女に会うためにきたのではなかったからであるが、目当ての人は出かけていて、いつ帰ると知れないという。

「思い出しましたか」

ながそう言ったように思ったけれど、口は少しも動いていなかった。

訪ねた人に会えない私は、そのまま帰ることにして女にはその旨を伝えた。私が入り口の扉のほうへ向かって女に背を見せたそのとき、薄情なのね――と言ったように聞こえた。しかし、聞こえたという気がしただけかも知れず、よくは判らなかったけれど、とにかく、私はその部屋を出た。

何日かして、外から帰ってきたら、家の郵便受けに手紙が届いていた。封筒の裏を見ると、知らない名前と住所だったのに、なぜか、あの女かだと判った。

湖畔の宿の名入りの便箋が、一枚だけ入っていて、右上りの少し上の辺りに、五ミリほどの黒い点が描いてあるだけで、ほかにはなにもない。それが、あのはくろであろう、湖の形だということはすぐに判った。黒い点は見つめるほどにじんで大きくなって、深いところまで誘っているようであった。それが若えだん私に迫って視界を覆いつくし、と思うまもなく、私は湖に引き込まれ、底をめがけて沈んでいくのであった。

備仲臣道 Binnaka Shigemichi 1941–
鹿児島高等農大卒業生まれ、東武業
宇府第一高等学校卒 山梨時事新聞記者 月刊新山梨編集発行人
2006 年、第 6 回内田百閒文学賞優秀賞受賞
著書『蘇る朝鮮文化』（明石書店）
『高句麗残照』（批評社）
『巫高麗太郎と朝鮮』（批評社）
『ある在朝日本人の生涯』（社会批評社）
『内田百閒文学散歩』（現量社・2013 年 8 月）ほか 5 冊。
kazenonagune@yahoo.co.jp

人々は議論に夢中で誰も虹に気づかない 1170×480mm 油彩／キャンバス 2014

人々は議論に夢中で誰も虹に気づかない

Tomoro KAWAI 1976 –
川合朋郎

家の近所で時折見かける浮浪者の寝ていつて、あぁそうかと気づいたことがあった。

その寝の特徴は髪の毛にある。

永らく洗っていない髪はフェルト状に固まって板のよう。

横幅は 2 0 センチ程、縦の長さは約 1 メートル、ゴワゴワした髪の厚みは 5 センチ程である。

たぶん相当重いだろうが、寝はその小さな背中に登々と髪の塊を尻の下までブラ下げて徘徊している。

この寝は 3 0 年前、私が小学生の頃、大阪の梅田という街の地下鉄の駅の階段に座り込んで居た寝と同一人物だ。

驚くべきことにあれから過ぎた幾年か寝には関係しておらずまったく変化がない。見た目も臭いも全く同じだ。

恐らく、少なくとも確実に数百年は生きているのだろう。

時空を越えて彼岸に現れる寝。

そりゃそうだろうと納得する私が居る。

川合朋郎 Tomoro Kawai
1976 年大阪出身 画家
東京藝術大学大学院修了
http://tomorokawai.com
展覧会情報
Nagano Art File 2014「ART FOR SALE展」2014 年 11 月 29 日〜12 月 20 日 FLATFILE
12 月 さんしんギャラリー書 三鷹／静岡

雨ニモマケズ、カミソリニハマケル

Ami IMAI 1990–
今井あみ

覚えたのは小学校 1 年生の頃、私の学校では全校生徒が宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を暗記し校長室へ発表しに行き、クリアすると紙切れ（どんなものか覚えていないけど）がもらえた。その紙切れの内容は通ごこしに盗うものに変わっていく。それを楽しみに、背っていない漢字には ふりがなをふって読み、言葉の意味も分からずとも、夢中で暗記しては校長室へ発表しに行った。「でくのぼうと呼ばれ・・」の、でくのぼうってなんだ？ 大きさで言えば 3 m くらいあるパンパンに太ったトロールみたいな妖怪っぽいのを想像していた。 1 0 年以上経った今でも全て暗記できているのには自分でもびっくりする。未だに詩の意味を調べたりはしていない。調べると試みたわけでもないけれど、多分私はこの詩を一生覚えているんだと思う。

なぜ、色んな事柄を記憶する必要があるのか。

学校のテストは、持ち込み禁止だし、カンニングペーパーだってもちろんダメ。

テストは、そういうルールがあるから色んな事柄を覚えていかないと、武器がない状態で戦うことになる。

そういうルールがあるとは以外は、百科事典でも持ち歩けば無理に記憶しなくたっていいじゃないか。

人の脳のデータ容量は、メモリーカードで例えると何メガバイトなのだろう。果たしてどのくらいの情報を覚えることができるのだろうか。

弁護士さんは、六法全書をほとんど覚えていると聞いた事があるけど、あんなに分厚い本の内容をほとんど覚えたら、耳の穴から情報がこぼれ落ちちゃうんじゃないかと心配になる。

機械関係に疎い私はメガバイトとは、どの位のデータ容量なのか分かっていないのだけど、データ容量対決、人間の脳 VS メモリーカードだと、どちらが勝つのだろうか。保存機能以外にも焦点を当てたら、人間の脳の方がメモリーカードよりも出来る事が山ほどあると思う。なので、総合的な勝利は人間の脳だと思うんだけど、情報の記憶に関してのみならば、メモリーカードの方が優秀なんじゃないか。という疑念を抱いていても学生だった私は持ち込み禁止のルールの中で生きていたので、色んな事柄を覚えた。私は、「覚える意味はこう！」だから、メモリーカードじゃなくて自分の頭で覚えるんだ！という脳に落ちる理由がないと、ムズムズする人種だったので、脳に記憶する意味を自分なりに見いだしていった。

例えば 38 人がおんなじ国語の授業を受けたとしても、一人一人まるっきしおんなじデーターで頭に保存している訳ではないだろう。それぞれオリジナルに収捨選択して記憶していく。それと一緒にそのときの感情とか思いも記憶されていく。それは、持ち歩くのに重たくない「自分オリジナルの辞書」みたいに。いつなんどきにも持ち歩いたり、莫大な量の記憶から、スッと目的のデータにたどりつく。あのときに似た感情になったとき、あのときと同じ同じにおいなどで、情報を思い出す事もできる。脳は自分の中にあるから荷物にならない。「自分オリジナルの辞書」ってことで、ようやく脳に落ちた私でした。

補足　この「自分オリジナルの辞書」、削除するのは苦手みたい。書き換えたり、新たに付け加えることは出来るのだが、必要なと思って削除しようと思う項目を消そうとすればするほど、余計に削除できない風にできていた。

仕事ができる！とは、何だろうか。

仕事だから割り切るだとか、仕事なんだからで果たしてどれ程のことが許されるのだろうか。

極端な架空の話として、それが仕事ならば 100 人が宗くはめになっても、1 人を救うこととがありえるのだろう。仕事の内容によってもずいぶん変わるんだろうけど。

ではなに、仕事の内容が同じだった場合、行う事柄は同じでも、一人一人が自分の「ポリシー」の元に動いているだろう。その「ポリシー」は、みんなが同じ方向を向いているのであるならばぶつかりようのかもしれないけど、同じじゃないからぶつかる。でも、同じだったらなんかヤバそう。なんかヤバそういうのは、なんとなくロボット的で怖い。という気持ちと、説明しきれない気持ち悪い感じがする。

壊しては組み、また破壊してきた自分のポリシーがあるように、相手にもきっと、壊しては組み、また破壊してきたポリシーがある。それを感じるだけで少し胸に落ちる。

カミソリで膝小僧をやってしまったから、バンソーコーを貼って学校へ行った。

「あっ、カミソリ食け？」と、好きな子に聞かれる。

嬉しいやら、恥ずかしいやら。

だって、カミソリで膝小僧をやっちゃったのは、毛の処理をしたから。

制服のスカートから出る膝小僧くらいはつるつるでいたいじゃない。

毛の処理をしてるってことが、ばれた・・？ってことは、膝小僧に毛があるってことをばれた？

恥ずかしい。恥ずかしいよ。

でも・・・気づかれないよりも、ずっと嬉しい。

大人になって、久しぶりに膝小僧をカミソリでやってしまった朝、そんなことを思い出して、別にもう血は止まっているのにバンソーコーを貼ってみた。

今井あみ Ami IMAI 1990 年長野市生まれ
表現者 &／士社会人
2013 長野県立金属所だより「表紙担当
2014 N-ART 展 2014 ガレリア長野道
2014 Nagano Art File 2014「ART FOR SALE 展」 FLATFILE（予定）
2014 小布施ほんさがキャラリー展示 小布施（予定）
imaiami1990@gmail.com

相転移

Gonta MARUYAMA 1982 –
丸山玄太

生きる気力を失った。理由など無い。昨日を振り返るのも、明日を見るのも、その意味を失ってしまった。一瞬がその時間の中で、過去にも未来にも生きる意味を失って、今を積極的に生きる理由など見つけられはしない。かといって死を選ぶ理由もない。認識の均衡の気薬さに期待をしないではないが、それを確認する方途はなく、幻想に浸ることしもできない。だから、老人がそうするように、今の生をただ延長させている。何にも理由がないから今をただ延長させるだけである。

この状態を、生、と言えるだろうか。死とは異なるのであるから、やはり生ではあるのだろう。だが、死者が何に対しても無反応である、つまり何をも認識をしないという意味において、この状態は死と変わりはしない。つまり、死者のように生きている、のであり、これは、生と死という対照の併置が可能であることを指し示している。

我々の認識は、あらゆる事物を二元論的に扱う。形而上学的認識は、生と死のように、自然から神、人へとその対象を変えながら、それとこれ、という差異の認識に基づいた文化を発展させてきた（カーマインとそれ以外というような）。言い換えれば、差異に対する認識を強化してきた。それは、自然淘汰という原理の中で、脆弱な人類が社会を形成するために必要であった手段、選択した手段ということである。その結果、あらゆる生物・資源を駆逐しながら、人口七〇億という世界を現在形成するに至っている。

では、認識以前（原始社会以前）はどうだったのだろうか。生と死を認識しない（選択しない）ということは、先にも述べた通り、死者のように生きる、ということだ。これはあまりに消極的過ぎるであろうか。認識とは無関係に、地球は回り、空腹はおとずれ、眠りに落ちる。生は知らずに与えられ、生そのものが生の基盤となる。しかし、差異を認識をしない限り、すべての価値は等しい。生も死も、神もくもも、これもそれもあれも、すべての価値が同等であるなら、優劣付けすべては無価値であるということでもある。したがって、私たちが獲得し強化してきた差異の認識は、無価値の認識からの逃避、とも言えるのではないだろうか。

このことは、だからこそ人類は社会を形成してきたという自己矛盾を含んでいる。しかしながら、認識を強化してきたことは間違いない。これは問題提起ではなく、前時代の認識を改良、改革することによって無価値から抜けて、価値を作り出そうとする相転移運動である。だがしかし、逆さかっているものです、実は逆ついてしまっている。

現代国家の始ざがベンサムを創始者とする功利主義を基本理念とした社会体制をとる。無論、この国も民主主義という政治思想だ。「正しい行為や政策は最大多数の最大幸福をもたらす」という原理は、最大幸福は正しいとも言え、この正しさは、法治国家であることから規制にある。だが、規制とは個々人の安全を担保にした幻想である。正しさの尺度などの場によって反転することは人類の歴史がそのまま示してきた。また、現代のように多様化した社会においての尺度は何とは、欲するものも多種多様である以上、少ない、あるいは無い。そのために、ヒエラルキーにおける管理者は現実を小出しに提示し、幻想的未来像を提出する。

このように、現在に至っては幻想だけが並べられた状態である。最大幸福も正しさも如何様にも差し替え、替える。通貨のように、それが清浄であり、価値の創出が可能であると虚像を見せられている。しかしながら、個々人は安全を担保に差し出しながら、効用の最大化を望んでいるだけで、このまやかしに見てみぬふりをする。通度はリスクマネージメントからなのか、諦めからなのか、そう教育されてきたからなのか。何にせよ、無価値であるという認識から逃避してる。このように我々は、無価値から離れているつもりで無意識に近づいているのである。当然の帰結として、この社会がパノプティコンに化するだろうことが考えられる。それが、幻想へのすり替え を行う者の効用を最大化するのだから。

ここから逃れるには、無価値の認識を認識しなければならない。逃避を終え向き合わねばならない。生と死の対照性はある起点からものであり、先に述べた通り、位相を変えさえすれば併置は可能である。これは、価値の二重否定であることは明白である。ただし、円環としての二重否定ではないことは肝に銘じなければならない。

丸山玄太 1982 年長野市生まれ 東京在住 クリエイター
http://undergarden.com

マリオネットオペラ

Akiko TOKUTAKE 1955–
徳武安紀子
Akio UMEDA 1957–
梅田明雄

マリオネットオペラ vol.Ⅲ
「椿姫 La Traviata」
2014 年 11 月 29 日 ネクト文化ホール
党主役（バリトン）演出・音楽監修）
小島美穂子（ソプラノ・ピロ指揮）
山中和子（ピアノ・合唱指揮・音楽監修）
細川奈津子（ヴァイオリン）
林美和（サクソフォン）
小島遠子（チェロ・アンサンブル諸作成・スケジュールマネージメント）
いいづな山妖精協会合唱団／石井和子・小林典子・竹内陽子・柳澤立子・渡辺晴美・椙津たくみ・内田悦子・塚田美穂
マリオネット操作／藤井静子・柳澤立子・徳武安紀子
脚本／徳武安紀子
字幕・プロジェクター／山中恵介
記録／金子敏郎
美術・マリオネット制作／いいづな山妖精協会・Tokusan
党主役・徳武安紀子 共同演出
主催：いいづな山妖精協会

ヴェルディは私にとってあまりなじみのない作曲家でしたが向き合ってみればみるほど、不思議な魅力にぐんぐん惹き込まれてゆきました。中でも父親役のジョルジュ・ジェルモンの存在に強く惹かれました。そこで今回はジェルモンとヴェルディのドラマを中心に台本を組み立ててみました。アルフレード役は、もっともらの声に近いといわれるサックスで！というのもそのためです。ちょっと不思議なマリオネットオペラの世界を楽しんでいただけたら幸いです。

公演に携わって厳いたすべての皆様と、お越しのお客様に心より感謝申し上げます。

2013 Art Director, Text by Akio UMEDA

徳武安紀子 Akiko Tokutake 1955 生まれ
明治学院大学英文学科卒業 劇団民衆舞台所属 30 才で飯綱町に転居
料理研究アリコーレッジ開設現在にいたる。
欧風家庭料理アリコ・ルージュ restaurant haricot rouge
電話 026-253-7551

梅田明雄 Akio Umeda 1957 年生まれ
長野県千曲市在住
梅田流園芸用土作家
http://c55.jp
https://www.facebook.com/akio.umeda

キッチン

Tsu MIYUKI 1972–
三船ゆい

（序）

- 始まりの朝 -

台所に立って使い込んだやかんで湯を沸かす。bump of chicken の歌が頭の中でくるくる鳴り響く。

♪ここだって教わったなま・・・

ほはくらくと音を立てるやかんの口から上る湯気を見ているようでいてどこか遠く、過去の記憶を辿っていた。

（一）

足を一歩踏み込むと、温度が一度だけ上昇したような気がした。

（顔を上げて と私に語りかける）

顔を上げた。

（おかえり）

（誰も待ってやしないけど）

何だか待っていてくれた人が迎えてくれたみたいだ。

濡もいない キッチン

温かい気持ちが帰ってきに

歩き回れるほどにすぎる キッチン

ご飯を炊くお米に近密う触れながら、小さく挨拶をした。

「ただいま。」

上京している間も、年に何度も帰っているから、久しぶりという訳じゃないのに、この日は十数年も経っていてとろへ戻ってきたような、そんな空気に満たされていた。

ポッ、シューーーッ。

給湯器が再び熱を保とうとする音。カタカタ コトコト。にわかに、懐かしい匂いがする活気を呼び起こし全体に広がった。流しを覗き込むと、そこに置かれた数枚の食器が待っている。蛍光灯の明かりに照らされて、私が手を伸ばすのを待っている。

「お疲れ様、さいにになろう。」

ステンレスを叩き付ける水の音が心臓に響いて、頭の中は空っぽに。

（それで手が無駄なく動くんだな）

根拠も定かでない数式が頭の中を走る。

なんでなんだろう

とても居心地がいい

つづく

三船ゆい Yui MIFUNE 1972 年生まれ
長野県山ノ内町在住 主婦

灰声微睡

Tomoyuki MACHIDA 1959–
町田哲也

雪融けだったか梅雨の後先だったか記憶の所々に水溜りがあり、ずぶずぶと足が沼に飛び跳ねては まず足首だけがすっぽり抜けると前後左右にけぐらく笑い、沼の中を歩いて行くと